

# 歴史を語る建物たち

庄内編  
(第14回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 清亀園 (酒田市)



「本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」と謳われるほどの栄華を誇った本間家が、かつて酒田はもちろんのこと、日本を代表する大地主（豪商）であったことはあまりにも有名である。しかし、酒田では本間家に次ぐ大地主（豪商）であった伊藤家を知る人は、多くないのではなかろうか。清亀園は明治24年、伊藤家の別邸として建てられた。

### 油商から財を成した伊藤家

『酒田市史』には、伊藤家当主・伊藤四郎右衛門に関する記述が随所に登場する。伊藤家当主は代々「四郎右衛門」を名乗ったが、初代四郎右衛門は、江戸時代に現在の鶴岡市大山で油商を始め、酒田に移って財を成した。そして、蓄えた富を土地に投資して大地主となり、さらに資本を拡大していった。

伊藤四郎右衛門の羽振りの良さについては、いくつかのエピソードがある。4代当主の時代に作られた文

政12 (1829) 年の庄内長者番付では、伊藤四郎右衛門は、本間と並んで最上級の「行司」に名を連ねている。また、5代当主の時代の天保11 (1840) 年には、庄内



庭から撮影した清亀園の建物。草木の配置は、今も当時からほとんど変わっていない（撮影時期不明）。  
出典：酒田市の市史編さん室所蔵の写真を、筆者が許可を得てデジカメで撮影

藩主・酒井家を長岡へ、長岡藩主を川越へ、川越藩主を庄内へ移封する命が幕府より下った。詳述は避けるが、これは酒井家にとって極めて不利な条件であったため、藩主を慕う領民は必死の抵抗を行った。翌年、この命は却下されるが、そのために領民が藩に上納した寸志金5,544両のうち、本間家が2,000両、伊藤四郎右衛門が1,000両と群を抜いていた。

一方で、伊藤四郎右衛門は文化にも造詣があった。とりわけ、4代目四郎右衛門は能楽をたしなみ、屋敷に能舞台を設けるほどであった。また、清亀園を建てた7代目四郎右衛門は、その造園を、酒田が生んだ稀代の名庭師・山田挿遊に託し、自らも別邸に仲間を招いて将棋や俳句を楽しんだ。

### 酒田大火後に市が取得

大正期に伊藤家が石油事業に失敗して没落すると、清亀園は、酒田の木工業に尽力した北原直次郎の手に渡り、北原の死後は池田亀三郎の所有となった。ただし、その辺りの経緯は明らかでない。

酒田出身の池田亀三郎は、東京帝国大学（現在の東京大学）を卒業後、三菱合資会社（当時）に入社し、三菱油化（現在の三菱ケミカル）の初代社長として鹿島や四日市に石油化学コンビナートを建設するなど、日本の化学工業界の重鎮として辣腕を振るった人物である（『現代庄内人物名鑑』より）。

もともと、池田亀三郎は酒田にいなかったため、普段は榊ふとんの池田が、従業員の貸家などに使用しながら管理をしていたようだ（酒田健康生活協同組合の資料より）。しかし、庭の手入れは十分に行っていなかったため、まるで藪のようで、タヌキも出るくらい草ぼうぼうの状態だったという。

昭和52年に池田亀三郎が亡くなり、清亀園は、酒田市が昭和54年に遺族より買収した。酒田市では、昭和51年に日本の災害史にも残る酒田大火が発生し、昭和54年には異例のスピードで復興宣言を果たした。当時の市長であった相馬大作は、回顧録『草鞋をつくって二十年』の中で、復興宣言の年に清亀園を買収した理由について、「大火の教訓の一つとして、緑地の確保が叫ばれていた」と述懐している。

### なぜ貸館になったのか？

買収後は荒れていた庭園を整備し、往時の姿を取り戻した。一方で、建物についても、日本の伝統建築研究の第一人者である、京都工芸繊維大学の中村昌生教授（当時、現名誉教授）が調査を行い、庭園との一体的な調和を重視した上で、一部改修して保存すべきとの報告書を作成した。なお、京都伝統建築技術協会理事長でもある中村氏は、平成6年に完成した酒田市の生涯学習施設「出羽遊心館」の設計も行っている。

ところで、改修を終えた清亀園は、観光施設ではなく、茶会や将棋など、市民がイベントに利用する貸館として再出発することとなった。現在は単体運営だが、かつては市の中央公民館の分館であった。

その理由は、資料不足もあって定かでない。しかし、

前出『草鞋をつくって二十年』に「多くの市民から利用していただいております。買収当時は、大火復興のため財政事情の苦しい時期であったが、いま市民の方々が喜んでおられる姿を見てみると、良かったと思っている」という記述があることから、当初より市民に広く利用してもらう目的があったと推測される。さらに想像を逞しくすれば、清亀園で文化活動に興じた伊藤四郎右衛門の息吹を復活させたいという思いがあったのかもしれない。

### 地域資源の掘り起こしが重要

清亀園の庭園は、開館時間内であれば誰でも出入り自由だ。建物も、イベントが行われていなければ無料で見学することができる。シルバー人材センターから派遣された3人のスタッフが交代で常駐しており、希望すればガイドをお願いすることも可能である（もちろん無料）。スタッフの一人である本間雄一さんは、会社員時代に営業で全国を飛び回った経験から、「人と話をするのが大好きで、ここでの仕事を選びました。建物は地味な造りですが、随所にさりげなく贅を凝らしており、それをお客さまに説明するのは楽しいです」と話す。

もともと、失礼を承知で記せば、清亀園は存在自体がいささか地味で、本間さんも、「(イベントも含めて)誰も来ないまま、掃除などで一日の勤務が終わることもある」という。また、建物も庭園も、100年以上昔の状態ではほぼ現存しているにもかかわらず、今のところは文化財に指定する動きもないようだ。

しかし、筆者が見る限り、建物は、山形県指定有形文化財の本間家旧本邸に劣らぬ趣があるし、山田挿遊がこだわって造った庭園も、国指定名勝の本間美術館（鶴舞園）同様、見ていて飽きない。

全国の多くの地域で人口が減少し、観光を中心とした交流人口の拡大が期待される中、地域資源の掘り起こしは喫緊の共通課題といえよう。そして、掘り起こすべき地域資源はここにある。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)



庭園の石灯籠。写真好きの方が、ハロウィン仕立てにカボチャを置いた写真(左上)を送ってくれたという。右の穴がゴウモリのように見えるのは偶然か？(筆者撮影、合成)